

## 4 淡海湖築造の苦勞

### ○難工事の未完成したため池

高島市今津町に位置する淡海湖（別名 処女湖）は、湖面12ha、貯水量132万トンで、人里離れた山中にある大規模なため池です。

苦勞して築造された歴史が評価され、平成22年に農林水産省が選定する「ため池100選」に選ばれました。

ため池の周辺には、ミズナラ、ホオノキ、カエデ類など落葉広葉樹も豊かであり、「守りたい育てたい湖国の自然100選」にも選ばれています。

### ◆旧川上村の明治の水利状況

旧川上村の酒波・伊井地区は箱館山の山麓に位置し、水源に乏しい地域でした。近傍の平地にある平ヶ崎・構地区を含めた一帯は、生産性の低い畑地が多く、住民の多くが、水源を確保して、畑地を水田化することを願っていました。

### ◆淡海湖の築造と松本組合長

明治の末ごろに調査が行われ、水源を石田川の上流、赤坂山川原谷に求め、貯水池を造り、1.2kmのトンネルを通して導水する計画が立てら

れました。大正2年に設立認可された淡海耕地整理組合の初代の組合長となった川上村の松本彦平氏が、計画の実行に向けて、親子二代にわたり尽力しました。同年4月に土堰堤工事に着手し、7月にはトンネル掘削に両サイドから着工しました。

工事は昼夜問わず進められましたが、一日あたりのトンネル掘削はわずか15cm～150cmほどでした。多量の水分を含む軟弱地盤に差し掛かると、トンネル坑内に大量の土砂が流出して、工事の進行が妨げられることも4度起こりました。土砂を排除しながら掘削が進められ、大正4年にトンネルが貫通しました。

貯水池の工事は大正14年に全て完了し、新たに整理された耕地を含む100ha弱の農地に水が行き渡るようになりました。しかし、松本親子は、困難を極めた工事の心勞により、2人とも完成前に他界しています。

### ◆淡海湖の老朽化と改修工事

淡海湖は、完成から90年余りが経ち、老朽化が進んでいます。また、地震時の堤体斜面の安定計算を行った結果、現況の堤体断面では、最新

の基準を満たしていないことが分かりました。

農業用水を供給し続け、災害を未然に防止して地域の住民が安心して暮らしていけるように、堤体の補修や洪水吐、取水施設の改修などを進めています。

(参考)

「地域に愛される淡海湖」、『滋賀のむらだより』2, p.5-6, 滋賀県農政水産部農村振興課

滋賀県教育委員会事務局編(2000)『滋賀県の近代化遺産—滋賀県近代化遺産(建造物等)総合調査報告書—』p.32-33, 滋賀県教育委員会事務局

高島郡教育會編 饗庭昌威増補編(1972)『高島郡誌 全』p.1143-1148, 饗庭昌威



▲施工中の取水塔  
[撮影：石井田勤二氏、  
提供：高島市教育委員会]



▲取水塔（高島市）[提供：滋賀県]



▲施工中の斜樋・底樋 [撮影：石井田勤二氏、提供：高島市教育委員会]



▲淡海湖（高島市）[提供：滋賀県]

## コラム カバタにおける湧水利用

### 高島市新旭町針江のカバタ

カバタとは、湧水を利用した洗い場のことです。針江では、地下20mまで鉄管を打ち込むと自噴する地下水（生水：ショウズ）を、各家庭で生活用水に利用しています。

湧き出した生水は、まず最上流の「元池」で飲料水とに利用されます。元池から流れ出た水は「壺池」で野菜洗いや洗顔などの生活用水に利用された後に「端池」に流れ込みます。「端池」にはコイなどが飼われており、残飯をコイに食べさせて水をきれいにしてから、各家の前の水路へと流されます。水路に流れ出た水は、周辺の水田の用水としても利用された後、針江大川や中島内湖を経て、琵琶湖に流れていきます。

針江大川や内湖にも、大切な役割がありました。かつては、繁茂した水草は、刈り取って肥料として水田で利用され、堆積した泥も栄養分を多く含んだ土壌として水田に戻されていました。

「針江の生水」は、平成20年に環境省「平成の名水百選」として選定されました。水をきれいに保ち、豊かな水を大切に使いながら、カバタを中心に水を介した地域

固有の水利用と循環の仕組みが、現在まで引き継がれています。

(参考)

滋賀県教育委員会(2010)『近江水の宝』  
(針江・霜降のカバタ) 滋賀県教育委員会



▲壺池と端池（高島市）【『滋賀文化のススメ』より転載】



▲針江の町並み（高島市）[提供：滋賀県]



▲カバタに漬けられた鍋（高島市）[提供：滋賀県]



▲水路と町並み（高島市）[提供：滋賀県]